

取材日：2019年6月26日



糖尿病



東京都
区東北部医療圏

医師と医療スタッフが一体となり 高血圧、糖尿病、腎症の治療を一院で完結。

Point of View

- ① 院長が、糖尿病、腎臓、高血圧の専門医であり、糖尿病患者の腎症が進行しても転院せずにクリニック内で診療が完結
- ② 管理栄養士、事務職員が柔軟に医師の秘書業務を務めるなど、職種の枠にとらわれない柔軟な連携体制で患者と向き合う
- ③ 患者とスタッフの距離、医師とスタッフの距離を近づけることで、医師と患者の距離が近くなる

熊野前にしむら内科クリニック
院長

西村 英樹先生

熊野前にしむら内科クリニック
管理栄養士長

花積 直子氏

熊野前にしむら内科クリニック
看護主任

伊藤 未来氏

熊野前にしむら内科クリニック
事務長

菊池 真実氏

綿密な糖尿病医療を めざして開業に踏み切る

2012年、東京都荒川区に開業した熊野前にしむら内科クリニックは、糖尿病をはじめとする生活習慣病を専門に診るクリニック。院長の西村先生は、糖尿病、腎臓、高血圧の専

門医であり、いわば生活習慣病のスペシャリストだ。

長年、勤務医であった西村先生が開業に踏み切ったのは、自身が理想とする「綿密な糖尿病医療と患者サービスを実践するため」だった。「以前、勤務していた病院では、内科全般の診療を行っていたので、特

に、糖尿病専門医としての力を十分に発揮できませんでした。スタッフとチームを組んで治療にあたる体制も不十分で、たとえば、インスリンの導入指導でさえ、看護師の手がまわらないときは、医師が行っていました。

自分の専門医としての経験を生か



左から西村先生、花積氏、伊藤氏、菊池氏

しつづ医師とスタッフ同士がしっかりと連携して患者さんと向き合い、そのうえで診療をするには、地域に密着した専門クリニックをつくるしかない。そうした思いに突き動かされて、開業を決意したのです」（西村先生）

近年は、糖尿病専門医と腎臓専門医の密な連携が模索されているが、西村先生は両方の専門医であるため一人二役をこなす（【資料1】）。

また、同クリニックでは、循環器の専門医による専門外来も開かれており、多くの糖尿病患者は合併症についても同クリニック内で治療を完結できる。病状に変化があっても、転科や転院をせずに、信頼するかかりつけ医の診療を受け続けられるのは、患者にとって大きなメリットに違いない。

職種の枠にとらわれない柔軟な発想と協力体制

医師とスタッフが一丸となった同クリニックの強固な連携体制について、看護主任の伊藤氏が解説してくれた。

「管理栄養士はもちろん、事務、受付の担当者も糖尿病をよく理解していて、それぞれが患者さんから聞き取った生活背景などの情報を常に共有しています。

医師や看護師には言いづらかったことを、処置室などでポロっと話したりする患者さんもいらっしゃり、そうした細やかな情報を共有して、治療につなげられる体制が整っていますね」（伊藤氏）

同クリニックでは、職種の枠にとらわれず、それぞれができる役割を担うことで、連携体制がさらに密になっている。管理栄養士長の花積氏が話す。

【資料1】

CKDステージ別患者分布と糖尿病透析予防指導管理料算定実績

〈CKDステージごとの患者分布〉

※CKDの重症度のステージは、縦軸のGFR区分と横軸のタンパク尿区分を組み合わせせて評価する

	A1		A2		A3	
	人数(名)	割合(%)	人数(名)	割合(%)	人数(名)	割合(%)
G1	129	12.9	31	3.1	11	1.1
G2	369	36.9	146	14.6	24	2.4
G3a	103	10.3	53	5.3	22	2.2
G3b	24	2.4	28	2.8	17	1.7
G4	3	0.3	10	1.0	19	1.9
G5	1	0.1	3	0.3	7	0.7

〈糖尿病透析予防指導管理料の算定〉

男性9名 女性7名 合計16名（2019年1月1日～7月31日）

出典：西村先生提供資料

「私は管理栄養士ですが、診療中に先生のかたわらで、電子カルテに入力する医師事務作業補助者の役割も果たします（【資料2】）。

そのおかげで患者さんと接する機会が増え、検査の結果や患者さんの状況を間近で聞けるので、その後の栄養指導に大いに生かされます」（花積氏）

医師は電子カルテの入力作業をしないですむので患者の診療に集中でき、管理栄養士は患者の状態を微妙なニュアンスとともに把握して栄養指導ができる。職種の枠にとらわれない柔軟な発想、協働体制が、一石二鳥とも言えるシステムを生んだ格好だ。

「開院してから患者さんが増えるにつれ、診察中の電子カルテ入力が増え負担になってきました。きちんと患者さんに向き合って診察するため、必要に迫られて始めたことでしたが、思わぬ効果を生み、今では、もう1名の管理栄養士や事務職員にも、医師事務作業補助者の役割を担っても

らっています」（西村先生）

職種の枠にとらわれないという面では、特筆すべき点はまだある。事務長の菊池氏は、最近、東京糖尿病療養支援士（東京CDS）の資格を取得したというのだ。

「事務職なので直接、診療にたずさわりはしませんが、受付や会計時、あるいは診察室で医師事務作業補助者としてサポートする際、糖尿病の専門知識があると、先生やスタッフと連携できますし、患者さんに対する理解も深まります。

もともと糖尿病の知識があったわけではありませんが、日常業務の中で糖尿病を学び、東京CDSの資格を取得できました」（菊池氏）

モチベーションの高さからなのだろう、他のスタッフも専門資格の取得に対して意欲的に取り組む。看護師の伊藤氏は、同クリニックで働くようになってから日本糖尿病療養指導士（CDEJ）の試験に合格。管理栄養士の花積氏も新たな資格を取得した。

【資料2】

診療の様子



管理栄養士や事務職員が診療に同席し、医師事務作業補助者の役割も担っている。

出典：編集部撮影

「CDEJ」の資格は持っていましたが、西村先生が腎臓の専門医でもありますので、先日、腎臓病療養指導士の資格も取ったところ、患者さんの検査の数値を見て気づくことが多くなりました」（花積氏）

花積氏は、患者全員の1年分の尿中アルブミン値を集計し、腎症進行のハイリスク患者を拾い上げるなどデータ解析の一部も担当する。

治療中断者を出さないため さまざまなアプローチを

糖尿病性腎症重症化予防に関しては、さまざまなアプローチで、糖尿病の治療中断者を出さないための工夫を施す。

「通院が途絶えてしまう患者さんが少なくありません。特に仕事が忙しい働き盛りの男性に多いですね。当クリニックでは、3ヵ月来院していない患者さんには、受診をすすめる手紙を送っています」（西村先生）

受診勧奨状の発送は、菊池氏の担当だ。

「糖尿病で、本来なら定期的に通院

しなければいけない患者さんを対象に、3ヵ月未受診の方を毎月調べてお手紙を出しています（【資料3】）。月に5～6名くらい、多いときには10名ほどに発送します。

それを見て受診される方も3割程度いるので、勧奨状の発送は意味があると感じています。今日も、ある患者さんが『手紙

までもらってすみません』と言いながら来院されました」（菊池氏）

治療中断の理由にはいくつかあるが、前述のように忙しくて来院できないほかには、生活習慣を変えてもなかなか結果が出ず、治療を中断してしまう人も少なくない。西村先生が言う。

「結果が出ない方には、毎回同じような指導をするのではなく、飽きさせないような栄養指導の工夫が必要だと思います」（西村先生）

同クリニックでは、1kgの脂肪の模型を使って、体内の脂肪の量を実感させたり、スポーツ飲料にどれくらいの糖分が含まれているか理解してもらうため、空のペットボトルに含有量と同量の砂糖を入れて見せるなどの工夫を欠かさない。

飽きさせない栄養指導をするために、傾聴から発想を得ると話すのは花積氏である。

「栄養指導では、画一的ではなく、個人個人に合わせた指導が求められますので、まず患者さんが話したいことを、じっくり聞くようにしています。

そして患者さんの話から『これならば、実行できそうだ』と思える対策を探り当て、毎回違うアドバイスを心がけています」（花積氏）

それぞれのスタッフが 課題改善の意識を持って

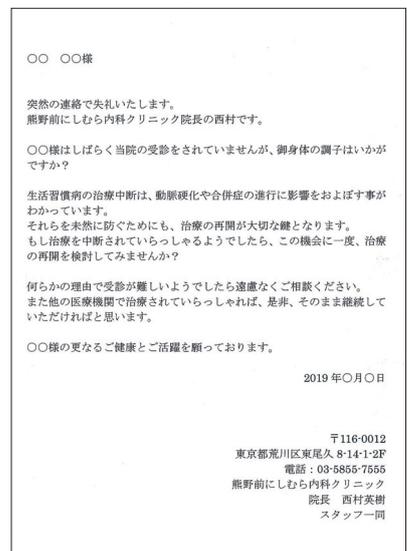
開院から7年目を迎えた同クリニックのスタッフたちは、現状に満足せず、問題点を見出し、改善策を模索している。

菊池氏は、長くなる待ち時間をなんとかできないかと思案する。「患者さんの数が、年を追うごとに増えていますので、待ち時間が長くなってしまいう傾向にあります。自分自身が患者として医療機関を受診したとき、順番もわからずに長時間待つのは辛い経験でしたので、予約を分散するなどして、待ち時間を短縮できないか考えています。

また、どうしても患者さんの希望が集中してしまう午前中や土曜日に

【資料3】

治療中断患者への 来院勧奨状



出典：西村先生提供資料

ついては、患者さんがストレスを感じずに待てられる方法を探っていきたいですね」(菊池氏)

伊藤氏は、患者の高齢化にともない、対応策が必要だと感じていると語る。

「インスリン導入時に、今までは若い人でも高齢者でも同じ時間をとって、インスリンの指導をしてきました。しかし、高齢者は視力も衰え、耳も聞こえにくくなっているため、指導時間を長く取るなど、配慮が必要でしょう。

ひとり暮らしの人も増えていきますので、院外の訪問看護師やケアマネジャーなどと連携を図りながら、インスリン導入がしっかり行われるようにしていかなければならないとも思っています」(伊藤氏)

花積氏は、糖尿病教室の参加者を増やすための施策に思いをめぐらしている。

「毎月1回、糖尿病教室を開き、患者さんが興味を持てるテーマを設定したり、講演する人を毎回変えるなどの工夫をしていますが、参加者が少ないのが現状です。

今は、院内にポスターを掲示していますが、もっと効果的な告知方法を検討して、多くの人に集まってもらえるようにすることが課題です」(花積氏)

価値ある診療を提供できる 理想のクリニックに向けて

これから、熊野前にしむら内科クリニックはどのような方向に進んでいくのだろうか。西村先生から、独創的なイメージを聞き出すことができた。

「ホテルに行くと、ドアマンやベルボーイが、お客様を出迎え、部屋へ案内し、コンシェルジュやフロント

クリニックのメンバー



出典：編集部撮影

が、ほしい情報を教えてくれたりします。

こうしたホテルでのお客様を出迎えてからお帰りになるまでの一連の過程やサービスを見ていて、私はクリニックがホテルから学ぶべき点が多くあると思います。クリニックでも、スタッフがベルボーイやコンシェルジュのような役割をし、必要な情報を患者さんに提供しながら案内できれば、訪れる患者さんの満足度は、きっと高くなるはずです」(西村先生)

菊池氏が、患者の待ち時間の長さを憂慮していたが、西村先生も「現在の状況のままでは患者さんが長く待たされるのは、快いはずがない」と言う。

ここで、西村先生が、「たとえ待ち時間が長くても、診療への満足度が高ければ、患者さんからの文句は出ないのではないか」との持論を展開してくれた。

「先ほど、模型やペットボトルを使

った栄養指導で患者さんを飽きさせないようにしているお話でしたが、医師の診療、看護師や管理栄養士の指導が新しい発見に満ちていたり、何か将来に光明が見えるようなものであれば、多少、待ち時間が長くても、患者さんの満足度は高いのではないのでしょうか。

患者さんが喜んでくれるような付加価値を診療の中で提供するのが、これからのクリニックの理想だと思います」(西村先生)

西村先生の発想の豊かさには驚くばかりだが、熊野前にしむら内科クリニックが、さらに患者の通いたくなるクリニックへと発展していくことは、想像に難くない。

熊野前にしむら内科クリニック

〒116-0012
東京都荒川区東尾久8-14-1 2F
TEL : 03-5855-7555